



〈雑録〉本邦製麻業ノ聯合及ビ合同(其一)

佐野, 次郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 7(3):406*-417

(Issue Date)

1909-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051444>



之ヲ實行スルニハ穀物及穀粉ヲ政府ノ專賣トシテ利益ヲ求ムルヲ要スト云フニアリキ即チ穀價ノ下落ハ彼等ノ忌ム所ナルノミナラズ穀物專賣ニヨリテ生ズル國庫ノ利益ヲ全部自己ノ手ニ收メントスル計畫ナリキ尤モ其後穀價騰貴シタレバ現今ニテハ多少其議論ヲ異ニスベキモ要スルニ社會民主黨トハ正反對ノ見地ニ立チ表面ノ議論トシテハ恐クハ「國民ハ穀物ヲ自給スルヲ要ス」ルコトヲ理由トシテ專賣ニ贊成スルナラント思ハル

(3) 製粉業者 彼等ハ今回ノ計畫ノ發頭人ニシテ其爰ニ至レルハ全ク獨逸同業者ノ競争ニ堪エザル爲也獨逸製粉ノ輸入ハ急劇ニ増加シ昨一九〇八年ニハ遂ニ瑞西製粉業者ノ仕事ノ三分ノ一ヲ奪フニ至リタレバ若シ此儘ニ進行セバ同國ノ製粉業ハ殆ド全滅セントズル患アル也

斯クノ如ク生産者側ノ希望ト消費者側ノ希望トハ全ク相反スルヲ以テ縱令專賣ヲ實行スルモ

其經營ハ非常ニ困難ナルヲ免ガレザルベシ即チ生産者ヲ満足セシメントセバ消費者ノ反抗ヲ受クベク消費者ヲ満足セシメントセバ生産者ハ破産ノ悲境ニ陥ラントス若シ兩者ヲ共ニ満足セシメントセバ國庫ハ多大ノ損失ヲ蒙ムルベキ也要スルニ穀物及穀粉專賣ノ前途ハ暗黒ナリト云ハザルベカラズ

本文ハ Ztschrift für Socialwissenschaft, 1909
ニ出デタル Albert Meyer ノ記事ニヨリテ作レリ

本邦製麻業ノ聯合及

ビ合同 (其二)

商學士

佐野次郎

(一)

歐洲諸國殊ニ英國及ビ佛國ニ於テハ十九世紀ノ前半ニ於テ製麻業ハ既ニ工場制工業ノ域ニ達

セリト雖モ本邦ニ於テ機械力ニヨル製麻業ノ起
リシハ最近二十餘年來ノ事ニ屬ス、即チ明治十
九年九月當時ノ滋賀縣勸業課長高谷光雄氏經營
ノ下ニ大津ニ設立サレシ近江麻絲紡織株式會社
(資本金二十萬圓內十一萬五千圓有志者ノ嚮出)
ヲ以テ其嚆矢トナス。是ヨリ先政府ハ軍需品ノ
必要上製麻事業ノ忽諸ニ附ス可カラザルヲ悟リ
明治十一年農商務省技師吉田健作氏ヲ佛國ニ遣
ハシ、親シク製麻事業ノ調査ヲ爲サシメシガ、
其前記會社ノ設立サル、ヤ政府ハ金八萬五千圓
ヲ貸下ゲ、且ツ吉田技師ヲシテ之ガ指導ノ任ニ
當ラシム、製麻ノ業茲ニ其端ヲ啓ケリ。而テ我
國古來麻ヲ產スト雖モ、製麻ノ原料ニ適セザル
ヨリ、吉田氏ハ佛國產麻ヲ栽培セントセリ。折
シモ北海道開拓論行ハレ、偶々其氣候風土、麻
ノ栽培ニ適セルコトヲ認メラレシヲ以テ、茲ニ
道廳ノ獎勵ヲ得愈々原料亞麻ノ移植ヲ見タリ。
又當時滋賀京都及東京ノ有志者北海道廳ニ請願

スルニ製麻會社設立ノ許可ヲ以テス、於是乎吉
田技師ハ又モ官命ニ依リ委員長トシテ創立ノ任
ニ當リ、二十年七月起工、二十三年七月工ヲ竣
ヘ開業スルヲ得タリ。是レ即チ北海道製麻株式
會社(資本金八十萬圓)ニシテ、道廳ハ向六ヶ年
間、年五歩ノ利益保證ヲ約セリ。以上二社ニ次
ギ二十三年四月麻ノ本場下野ニ於テモ亦近江ニ
倣ヒ一製麻會社ヲ設立セリ是レ下野麻紡織株式
會社(資本金二十萬圓後本社ヲ東京ニ移シ下野
製麻會社ト改名ス)ニシテ專ラ內國產麻ヲ原料
トセシガ後漸ク其不適當ナルヲ知り、亞麻ヲ使
用スルニ至レリ。降テ二十九年當時獨逸ニ行ハ
レシ「ラミー」紡績ニ倣ハントシ、實地調査ノ上
「ラミー」亞麻兩種ヲ原料トシ、製造ニ從事セン
トスル新會社計劃サレ、三十一年三月大阪ニ開
業ス、是ヲ大阪麻絲株式會社(資本金八十萬圓
?)トナス。

如此約十ヶ年間に四個ノ會社設立セラレシモ

創業後日尙淺ク、設備不完全、技術幼稚ニシテ販路澁滯シ、成績舉ラズ、殊ニ日清戰後ニ於テハ甚シク過剩生産ニ陥リ、市價ハ暴落ヲ告ゲ、同業者ノ競争ニ激甚ヲ極メ、其困難名狀スベカラザルニ至レリ、於是乎。是ガ救済策トシ、四會社重役ハ三十四年江州彦根ニ會合シ、需要地總代ヲ集メ、市價ノ協定竝ニ聯合販賣ノ件ヲ議決シ、後共同販賣所ヲ設ケ是レガ實行ヲ見タリ然レドモ各社ハ各方面ニ特殊ノ得意販賣人ヲ有シ、取引慣習ヲ異ニセルヨリ種々ノ苦情ヲ生ジ會社ハ其措置ニ窮セリ。依テ翌三十五年大倉喜八郎氏ノ斡旋ト安田善次郎氏ノ金融上ニ於ケル援助トニヨリ。四會社ノ合同ヲ企テ以テ弊害ヲ根絶セントセリ。然ルニ當時北海道製麻ハ重役澁澤男海外旅行中ノ故ヲ以テ合同加入ヲ欲セズ茲ニ於テ先ヅ三會社ノミノ合同ヲ企テシモ是又就ラズ、結局該三社ハ安田銀行ヨリ金融ノ便ヲ得、前回ニ比シ一層鞏固ナル販賣聯合ヲ組織シ

北海道製麻トハ唯從來ノ代價協定ノミニ止メ、以テ相互ノ競争ヲ避ケ、合同ハ是ヲ他日ニ期スルコト、セリ。時ニ明治三十五年九月ナリキ。聯合組織ノ結果ハ販賣ノ統一、金融ノ圓滑、經費ノ節減ヲ醸シ、着々トシテ好成績ヲ齎シ、會社ノ信用愈々厚ク、株主モ亦漸ク聯合ノ利益ヲ認メ、聯合三社間又意思ノ疏通ヲ見タリ。於是乎百尺竿頭一步ヲ進メ再ビ三社ノ合同ヲ劃シ三十六年三月三社ノ代表者ハ大阪ニ會合シ、大倉安田兩氏ノ盡力ニヨリ、新會社ノ資本金ヲ二百萬圓トナシ、各會社ノ合同條件ヲ定メ、同年七月一日日本製麻株式會社ヲ設立セリ。而テ翌三十七年偶々日露干戈ヲ交ユルヤ。軍需品ノ需要激增ヲ告ゲ、實ニ空前ノ盛況ヲ呈セリ、同年末ニハ遂ニ北海道亞麻製絲株式會社(資本金二十萬圓拂込七萬圓)ヲ買收シ、以テ原料ノ供給ヲモ掌握シ、三十九年末ニハ未拂込金二十二萬圓ノ拂込ヲ終ヘ、四十年更ニ事業擴張ノ爲メニ

百萬圓ノ増資ヲ斷行セリ。

抑々四大製麻會社ヲ打テ一丸ト爲スハ彼等多年ノ宿望ナリキ。然ルニ我製麻事業ヲ見ルニ、今尙日本北海道兩社ノ分立經營ニ係レリ。(註二)サレバ此際二社ノ合併ハ即チ宿望ノ貫徹ニシテ而モ生産上有利ナルハ勿論、我製麻事業ヲ統一シ獨占事業タラシムルモノナリ。於是乎、四十年一月又モ大倉氏ハ兩社ノ間ニ奔走盡力シ、同年六月兩社合同契約ノ完成ヲ見、同年七月遂ニ帝國製麻株式會社ヲ本邦否東洋唯一ノ獨占の一大製麻會社(資本金六百四十萬圓)ノ發生ヲ見ルニ至レリ。

註一 三社合同ニ際シ、北海道製麻ニモ加入ヲ勧誘セリ然ルニ當時遼澤男ノ歸朝後日淺ク、從テ製麻業ノ事情ヲ熟知シ居ラザルヲ以テ、尙熟考ヲ要ストノコトナリシヨリ三社ハ其大ニ手間取ル可キヲ看取シ、先ヅ三社ノミ合同セリ

(二)

以上ハ是レ我國ニ於ケル製麻事業ノ發達竝ニ

聯合及ビ合同ノ沿革ノ大要ナリ。然ラバ其聯合及ビ合同ノ起リシ原因組織及ビ影響ハ如何

抑々製麻業者ノ採リシ最初ノ恐慌救濟策ハ、實ニ聯合ヲ組織シテ相互ノ競争ヲ避ケ、需給ノ投合ヲ計リテ市價ノ低落ヲ防止セントスルニアリキ。請フ左ニ聯合ノ發生原因、組織竝ニ影響ニ付述ベン

第一 製麻業聯合ノ發生原因ハ主トシテ左ノ三點ニアリト云フヲ得可シ。

(イ) 一般需要ノ増加、殊ニ日清開戰ニ伴フ、軍需品需要ノ激増ガ事業ノ擴張工場ノ新設ヲ促シ、爲メニ過剩生産ニ陥リ、市價ノ低落ヲ來セシコト。(註二)

(ロ) 四會社ノ製品ハ何レモ其需要地ヲ同フシ自然競争ヲ惹起シ、粗製濫造、賣崩シノ弊ヲ生ゼシコト。(註三)

(ハ) 日清戰後勃興セシ企業ハ多ク不況ニ沈淪シ、聯合休止、合同販賣等ノ恐慌救濟策ニ

出デ、聯合ノ效果已ニ認メラレシコト。

(註四)

要之、無謀ナル事業ノ擴張ニ伴フ過剩生産、競争ノ激甚、延テ起ル市價ノ低落ハ遂ニ企業家ヲシテ資本ニ對スル危險ヲ自覺セシメ、是レガ救済策ヲ講ズルノ止ムヲ得ザルニ至ラシメタリ。於是乎彼等ハ自己行動ノ自由ヲ放擲シ、進ンデ聯合組織ヲ探ルニ至リシモノナリ。而シテ其最後ノ原因ガ間接ニ其成立ヲ助長セシヤ又疑ヲ容レザル處ナリ。

註二 例ヘバ、近江製麻ハ二十八年細絲工場ヲ新設シ、下野製麻ハ四十萬圓ヲ増資シテ鹿沼ノ外、日光ニ一大工場ヲ起シ、北海道製麻モ亦増資事業ヲ擴張セリ。加之大阪製麻ハ三十年「ラミー」製絲ノ名ノ下ニ新設サレタリ。

註三 四社ノ細糸ハ帷子用ノモノ、外ハ、大抵蚊帳用ニ屬シ、近江ノ長濱、越前ノ武生、其他廣島、高岡等需要地一定セリ。

註四 例ヘバ紡績業者ノ同盟休業、セメント及ビ石油業者ノ合同販賣等當時既ニ行ハレシモノ多シ。

第二 製麻業聯合ノ組織、我製麻會社ハ明治

三十四年及ビ三十五年ノ前後二回、聯合ヲ組織セリ。

一 第一回ノ聯合ハ三十四年四月ヨリ三十五年ニ涉ルモノニシテ、近江、下野、北海道、大阪ノ四製麻會社ヨリ成リ、競争ノ最モ激烈ナリシ、蚊帳用麻絲(二十二番以上三十番以下ノ品)ニ就キ、(イ)市價ノ協定ヲ爲シ、(ロ)各社ノ生産額歩合ヲ定メ、(ハ)其江越二州ニ供給スルモノニ就キテハ、特ニ共同販賣所ヲ設ケ、共同販賣ヲナセリ。故ニ所謂代價聯合、生産聯合及ビ販賣聯合ノ三種ヲ兼併スルモノト謂フヲ得可シ。

(イ)市價協定。各會社ノ代表者及ビ若干名ノ販賣人、事務所ニ立會ヒ、審査ノ上、個々ノ製品ニ付、其等級ヲ定メ、價格ノ割引若クハ種々ノ名義ニ依ル手數料、景品等ハ一切之ヲ嚴禁セリ。

(ロ)生産制限。各會社ノ製造機械ノ臺數ヲ標

準トシテ、其生産歩合ヲ定メ、前年度ニ於ケル販賣高ニ基キテ、需要高ヲ測定シ以テ一ケ年間ノ製造數量ヲ決定シ、而テ生産歩合ニ應ジ、之ヲ各社ニ割當テ製造セシムルモノニシテ、各會社ハ各一名ノ委員ヲ選出シ、諸般ノ事務ニ當ラシメタリ。

以上ノ如ク、聯合四社ハ代價ヲ協定シ、生産額ヲ制限シテ需給ヲ調節シ、依テ以テ市場ノ獨占ヲ企テタリ。而テ若シ一會社ニ於ケル、製品ノ持分丈ハ既ニ販賣済トナレルニ拘ラズ尙該會社ノ製品ヲ希望シ、注文スル者アル時ハ、四會社協議ノ上代價ヲ引上ゲ、特ニ製造ヲ許スト雖モ、反之ニ會社以上ノ製品、既ニ販賣済トナル時ハ、其殘品ノ價格ヲハ協定價格以下ニ引キ下ゲ販賣セシメ、以テ成ルベク各會社ヲシテ、一定額ノ販賣ヲ爲サシムルコトニ努メタリ。

(ハ)共同販賣所、四會社ハ又別ニ共同販賣所ヲ設ケ、各會社ヨリ一人宛ノ委員ヲ選出シ、諸

般ノ販賣事務ニ當ラシム。代表委員ハ販賣所ニ於テ品質ヲ區別シ、價格ヲ評價シ、各會社ハ販賣所ノ指圖ニ依ルニ非ズンバ、賣捌クヲ得ズ。又販賣所ハ各社ニ對シ、製造高ニ應ジテ一定ノ印紙ヲ渡シ、該印紙ヲ貼用消印セル品ニ非ザレバ、一切販賣ヲ爲スヲ得ズト定メ而テ販賣所ノ經費ハ一ケ年間ノ各會社販賣額ニ從ヒ各會社ヲシテ之ヲ分擔セシメ、違約者ニ對シテハ販賣ノ停止信認金ニヨル損害賠償等ヲ協約セリ。

由是觀之、製麻共同販賣所ハ獨逸ノ「カルテル」ニ於テ屢々見ル如ク、又我肥料共同販賣所ノ如ク、株式組織ニ非ズシテ組合組織タリ。各會社ハ獨逸ノ「カルテル」ニ見ル如ク、一方ニ生産者トシテ、一定ノ價格ヲ以テ共同販賣所ニ販賣シ、他方ニ販賣所ノ株主トシ、購買者ノ地位ニ立ツコトナシ。即チ單ニ代表委員ヲ出シテ、販賣ノ任ニ當ラシムルノミ、從テ各會社ノ計算ノ如キモ亦單獨計算法ニ依ルモノナリ。

二 第二回ノ聯合ハ三十五年九月ヨリ、三十

六年六月ニ涉リ、下野、近江、大阪ノ三會社間ニ成立セシ、販賣聯合是レナリ。即チ曩ニ四會社間ニ行ハレシ、麻絲代價ノ協定生産額ノ制限蚊帳用麻絲ノ共同販賣ハ、今ヤ百尺竿頭一步ヲ進メ、全麻製品ニ對スル高度ノ販賣聯合トハ化シヌ。是レ前ニ試ミシ共同販賣所ノ比較的好結果タリシニ反シ、市價協定ノ寧ロ不成功ニ終リシニ職由スルモノニシテ、東京ニ共同販賣所ヲ設ケ、下野、近江及ビ大阪ノ三ヶ所ニ出張所ヲ設置セリ。今其組織ヲ見ルニ、江越二州ニ供給スベキ、蚊帳用ノ麻絲合同販賣ノ場合ト毫モ異ルナシ、即チ各會社ハ委員ヲ選出シ、委員ハ商議員會ナルモノヲ組織シ、以テ重要事項ヲ決議シ、需要ヲ測定シ、各會社ヲシテ其生産歩合ニ應ジ生産セシム。而テ生産品ハ悉ク共同販賣所ニ差出サシメ、販賣所ハ之ガ賣捌キノ任ニ當リ決シテ直接販賣ヲ許サルナリ。然レンドモ其計

算方法タル、各會社ノ獨立計算ニシテ、販賣所ノ經費ハ其製品ノ販賣高ニ應ジ、是ヲ分擔セシメタリ。其他違約制裁法トシテ、會社ハ信認金三萬圓ヲ生産歩合ニ應ジテ釀出シ、販賣所長ヲシテ之ヲ銀行ニ供託セシメタル等、第一回ノ聯合ト異ルナシ、唯其前回ト異ルハ左ノ三點ニアリ。

(イ)全販路ニ涉リ、而カモ製麻品ノ全部ニ對シ、共同販賣ヲ行ヒシコト。

(ロ)共同販賣所長ガ聯合三會社ト無關係ナル者ヨリ選出サレシコト。

(ハ)金融ノ便ヲ得ル爲メ、特ニ安田銀行ト契約ヲ締結セシコト。

即チ是レナリ。就中最モ注目ヲ要スルハ、安田銀行對聯合三社ノ關係ナリトス。是レ前回ニ於テ痛ク金融上ノ不便ヲ感ゼシヨリ、特ニ同行ニ請ヒシモノニシテ、安田銀行ハ明治三十五年九月一日ヨリ向フ一ヶ年間聯合三會社ニ對シ、

總額壹百萬圓（各會社信認金ノ高ニ比例シ其被融通高ヲ定ム）ヲ極度トシ、三社發行ノ手形割引ヲ約シ、以テ販賣聯合ノ成立ヲ助ケタリ、而テ合同販賣所長ハ安田銀行代理人トシ、擔保物件ノ保管ニ任ジ、保管證券ヲ發行スルモノニシテ、聯合三會社ハ自己ノ製品又ハ原料品ヲ擔保トシテ、保管證券ノ交付ヲ受ケ、更ニ各自振出ノ約束手形ニ、聯合三會社中ノ他會社ノ裏書ヲ得ル時ハ、銀行ハ該擔保品ノ時價七掛ヲ以テ、何時ニテモ金融ノ便ヲ與フルノ仕組ナリ。サレハ聯合對銀行ノ關係ハ甚ダ密接ニシテ、其販賣所長ガ特ニ會社ト何等關係ナキ者ヨリ選出サレシ理由ハ容易ニ是ヲ推知シ得可シ。要之次回ノ聯合ハ初回ノモノニ比シ、其基礎鞏固ニシテ、完全ナル販賣ノ統一、需給ノ投合ヲ得、市場獨占ノ力モ亦強大ナリシモノ、如シ。

更ニ茲ニ看過シ得ザルハ、彼ノ販賣聯合ガ蚊帳用麻絲竝ニ細絲ノ濫賣防止ニ口藉シテ、各地

麻絲販賣業者ト麻絲販賣規定ナルモノヲ締結シ四個ノ地域（近江及ビ大和國、越前國、越中國安藝及周防國）ヲ定メ、各地域内ニ於テハ各組合ヲ組織セシメ、以テ一方ニ販賣業者間ニ於ケル競爭ヲ排除シ、彼等ノ利益ヲ擁護シ、他方ニ信認金ノ納付ヲ命ジ、且ツ組合ヲシテ一ケ年間ノ販賣高ヲ豫測シ、其取引高ヲ定メ、實際ノ賣行如何ニ拘ラズ、責任ヲ以テ買取ルベキ義務ヲ負擔セシメ、以テ完全ナル需給ノ調和、獨占の市價ノ維持ヲ計リシコト是レナリ。

第三 製麻業聯合ノ影響中其重ナルモノハ市價ニ及スモノ是レナリ。余ハ茲ニ數字のニ之ヲ證明スルノ材料ヲ有セズト雖、其聯合ニヨリテ從來ノ無謀ノ競爭ヲ排除シ、競爭費ヲ節減シ、大規模ノ販賣ニ依ツテ營業費ヲ節約シ、又無謀ナル市價ノ低落、常ナキ市價ノ變動ヲ防止シ得タルヤ疑ヲ容レザル處ナリ。殊ニ次回ノ聯合ハ其初回ノモノニ比シ、同日ノ論ニ非ズ。當時ノ

報告書ニ株主ハ其效果ニ満足シ、官民ノ信用亦厚キヲ加ヘ、利益配當ノ如キ從來無比ノ不振時期ナリシニ拘ラズ、尙能ク七歩ノ配當ヲ爲スヲ得タリ云々、トアルニ徴スルモ明カナリ。

(三)

我製麻業聯合ハ明治三十六年七月ヲ以テ遂ニ其形態ヲ變ジ、永續的合同トハ化シヌ、左ニ製麻合同ノ發生原因、合同方法、及ビ其影響ニ付略述セン。

第一、合同ノ發生原因、我製麻合同ノ成立ヲ促セシ原因種々アリト雖モ其重ナルモノハ

イ、職工ノ誘拐轉脫等ノ弊ヲ根本的ニ除却スルコト、

ロ、競争ヲ根絶シ、經費ヲ節減シ完全ニ市場ヲ獨占セントスルコト、

ハ、各會社ノ生産上ニ於ケル長所ヲ利用シ、生産特化ノ利益ヲ收メントスルコト、

ニ、海外販路開拓ノ爲メ、内地ニ於ケル競争根絶ノ必要アリシコト、

等ニシテ、是ヲ一言ニ蔽ハンカ「トラスト」ノ利益ヲ取得セントスル希望即チ是ナリ。彼ノ三十六年三月各會社ノ代表者、會合ノ際ニ於ケル合同協議案ノ要旨竝ニ其合同後ニ於ケル新會社ノ經營方針ニ徴シテ明カナリ。

第二、合同方法、下野、近江、大阪ノ三會社ハ合併シテ日本製麻會社ヲ生ミ、日本製麻會社ハ更ニ北海道製麻ト合同シテ、茲ニ帝國製麻株式會社トナレリ。左ニ此等ノ合同方法ニ付述ベシ。

一、三會社ノ合同、各會社ノ資産中、先ヅ利害ヲ異ニスベキモノニ就テハ、各自ニ於テ之ヲ整理シ、殘餘ノ固定資本、株券、製品、原料品ハ、一定ノ標準ニ從ヒテ之ヲ評價シ、以テ各會社ノ資産負債ヲ明ニシ、各社ノ財産ニ比例シテ新設會社ノ持分ヲ定メ、株主ニ對シテハ新株ト

舊株トノ交換ヲ行ヒ、法律上同時ニ解散シ、新設會社設立ノ手續ヲナセリ。而テ茲ニ注意スベキハ從來財界不況ヲ呈セシ爲メ、各會社實際ノ資産ニ於テモ動搖ヲ免レザリシヲ以テ、新設會社ノ資本額決定ニ關シ、特ニ注意ヲ用ヒ過剩資本ノ弊ヲ避ケシコト是レナリ。今新舊會社ノ資本額ヲ見ルニ左ノ如シ。(註五)

舊會社	資本	拂込額	固定資本	流動資本	債務	純資本
下野製麻	一〇〇萬圓	六〇萬圓	七五萬圓	三〇萬圓	三七萬圓	六五萬圓
近江麻糸	六〇萬圓	四〇萬圓	五五萬圓	一五萬圓	四七萬圓	六八萬圓
大阪麻絲	六〇萬圓	四〇萬圓	五五萬圓	一五萬圓	四七萬圓	六八萬圓
合計	二〇〇萬圓	一四〇萬圓	一八七萬圓	一四〇萬圓	一四七萬圓	一七三萬圓

註五、大阪麻絲ハ從來資本金八十萬圓ナリシモ、往年工場失火ノ不幸ニ遭偶シ、遂ニ減資シテ四十萬圓トナセリ、而テ其債務額不明ノ爲メ純資本高ナ明ニスル能ハズト雖、他會社ノ財産狀態ニ鑑ミ、假リニ其所謂拂込額、即チ四十萬圓ト考フルモ蓋シ不當ニハ非ザル可シ。

而テ合同後ニ於ケル日本製麻會社ノ資本金ヲハ、二百萬圓(拂込百七十八萬圓)トシ、以テ其

合同歩合ヲ定メ、大倉安田ノ兩氏之レガ評價ノ任ニ當レリト、果シテ我製麻合同ハ「トラス」ノ常弊タル過剩資本ニ陥ラザリシカ、假リニ此際一割ノ過剩評價アリタリトスルモ、尙拂込金額丈ノ實價ハ之レヲ有ス可ク、更ニ一般市場不況ノ際ナリシヲ以テ、合同後ニ於ケル資産價格ノ低落ハ僅少ナル可シ。加之合同ニ基因スル生産費、販賣費等節約サル、ノ實アリ。サレバ合同後ニ於ケル收益力ヲモ評價センカ、假令多少ノ超過評價アル場合ト雖、必ズシモ常ニ不當ノ評價ト謂フヲ得ザル可シ。由是觀之、我製麻合同タル彼ノ有名ナル International Mercantile Marine Co. 若クハ我大日本精糖會社大里精糖買收ノ場合ニ於ケル評價トハ、同日ノ論ニ非ザルナリ。

二、日本製麻ト北海道製麻ノ合同、合同方法ニ於テハ前回三社合併ノ場合ト同ジ、唯其異ルハ合同成立ノ時期ナリ。即チ兩社トモ日露ノ大

戰ニ際會シ、事業盛況ヲ極メ、從テ多大ノ利益ヲ獲得シ、需要ノ増加ニ應ズル爲メ、孰レモ増資ヲ行ヒタル後合同セシコト、換言スレバ不況ニ窮セシ結果合同セシニ非ズシテ、寧ロ好況時ニ於ケル積極的目的ニ基ク合同タル事はレナリ日本製麻ハ從來ノ資本金二百萬圓(全部拂込)ヲ四百萬圓ニ増資シ、北海道製麻モ亦之レト權衡ヲ維持スル爲メ、資本金百六十萬圓(拂込百三十五萬圓)ヲ二百四十萬圓ニ増加セシヲ以テ、其合同後ニ於ケル帝國製麻ハ實ニ六百四十萬圓(拂込四百萬圓)ノ大資本ヲ擁スル一大會社トハナレリ。

合同當時ニ於ケル兩社ノ財産狀態ニ關シテハ詳細ヲ知ルニ由ナシ、又斯カル増資ガ果シテ無代價株式^{ウオームストック}ノ發行ニヨリシモノナリヤ否ヤニ至リテハ、容易ニ之ヲ斷ズル能ハズト雖、時恰モ日露戰爭ニ際會セシヲ以テ、會社ハ何レモ多大ノ利益ヲ占メ、而カモ戰後財界好況ノ際ナリシヲ

以テ、當時ノ財産ノ如キモ拂込額以下タリトハ信ズル能ハザルナリ。合同前兩社ノ斷行セシ増資ハ是レ全ク需要ノ激增ニ伴フ自然ノ結果ニシテ、無謀ノ増資ト見ル能ハザルハ、我陸海軍ノ擴張、航海業ノ發達等ニ徴シテ明カナリ。假リニ百步ヲ讓リ、多少ノ超過評價^{オーバーエスティマ}行ハレタリトスルモ、今回ノ合同タル、全然獨占的地位ヲ取得セシメ、經營費ノ節約ヲ齎スモノナルヲ以テ、必ズシモ過剩資本^{オーバーキャピタル}ノ弊ニ陷ルモノト云フヲ得ザル可シ。要之、余輩ハ製麻業合同ニ於テハ過剩資本ノ弊ニ陷ルコト無カリシヲ信ズルナリ。帝國製麻會社ガ近年非常ナル不振時期ニ拘ラズ、尙能ク一割二歩ノ配當ヲ續ケツ、アルハ、勿論事業ノ獨占性ニ基クト雖、又以テ一部過剩資本ノ弊ニ陷ラザリシニ因ルニ非ザルナキ歟。

第三、合同ノ影響 合同ノ國民經濟上ニ及ス影響中、其重ナルモノハ生産上竝ニ物價ニ及ス影響ナリトス、而テ我製麻合同ガ

イ、生産上ニ及セシ影響ヲ見ルニ、合同一度就ルヤ各工場ハ各其長所ニ從ヒ、茲ニ生産特化ノ實行ヲ見タリ。即チ大阪日光ノ兩工場ハ主トシテ製絲ニ、大津鹿沼ノ二工場ハ製織ニ、各全力ヲ傾注スルヲ得タリ。彼ノ三社合同ノ際夜業中止ヲ行ヒシハ、一ツニ生産特化ノ結果生産額激増ヲ告ゲシ爲メナリト云フ。於是平漸ク製品ノ輸出、海外販路擴張ノ舉ニ出デ、三十六年八月以來加奈陀ニ向ツテ漁網用麻絲ノ輸出ヲ試ミ清國長江沿岸天津等ニ麻製品ヲ輸出シ、何レモ好結果ヲ納メツ、アリ、又日露開戰後軍需品ノ需要激増スルヤ、晝夜兼業以テ供給ノ任ニ當リ製品ノ整一、供給高ノ増加ハ能ク當局者ヲシテ遺憾ナカラシメタリト、而テ其一般

ロ、市價ニ及セシ影響ニ至リテハ、容易ニ是レ斷ズル能ハズ、何トナレバ會社供給品ノ一半ハ陸海軍々需品ニ屬シ、會社ノ積立金、消却金等ハ一部戰爭ノ餘惠トモ見ルベキモノナレバ也

然レドモ平時ニ於テ尙能ク一割内外ノ純益ヲ收ム、必ズシモ薄利ト云フヲ得ザル可シ、況ンヤ近年一般不況ヲ極ムルノ時ニ於テオヤ。余輩ハ合同後ニ於ケル麻絲市價ハ一般ニ騰貴セリト爲スモノニシテ又屢々商人ヨリ耳ニスル處ナリ是レ事業ノ獨占性ニ基ク當然ノ現象ニシテ怪シムニ足ラズ、唯是レヲ證スベキ統計ナキヲ憾ム而已。(未完)

山鹿素行ノ民政論 (其二)

(一名古學派ノ經濟及ビ

社會政策論)

商學士

田崎義介

六

素行ノ學問ノ究極ノ根本義ハ『不得止』ノ三字ニ歸着スル彼ノ哲學的真諦ニアリ。彼ノ道德論然リ、天地論然リ、易太極論然リ、人物之生論